



【登場人物】

紫の上……赤い着物で女房に囲まれ舞を眺める
源氏の君………白い衣
陵王の舞………庭の踊り手

【場面解説】

女三宮の降嫁ののち「若菜下」で発病して以来体調のすぐれなかった紫の上。現世に未練も無くなり出家を願い出るものの、紫の上と離れてしまうことは源氏の君にとってはとうてい容認できないことでした。桜の盛りの3月、二条院で紫の上主催で催された法華経千部の供養は、出家を叶えられなかった自身の後生を祈るものでした。物語では、法要の後、繰り広げられる花散里や明石の君たちとの文やり取りから、紫の上がいかに多くの人から慕われ、それぞれとの絆を築いていたかが描かれます。国宝・源氏絵巻で描かれたのは、まさに紫の上が亡くなる秋の夕暮れでしたが、この浄土寺本で最後に紫の上が登場するのは「春の御方」の最期にふさわしい、春爛漫の桜の季節でした。

【詞書】
ことばがき

扇面に書かれている文字

陵王、まいて急になるほどの
すえつかた

樂はなやかに

にぎは、しくきこゆる

【現代語訳】

陵王の舞が、急調になる終盤に、華々しくにぎやかな音楽の調べが聞こえます。